

# 平成30年度全国高校総体 「審判員報告書」

## C4 新体操女子

審判長 鈴木あおい・副審判長 伊豆島知佳

### 1. 採点上打ち合わせた事項

今年度から変更になったルールの確認を行い、映像を使った研修時間を多くとり映像研修を行った。

研修前半で確認をした新ルールを頭にいれ、映像を見ながら瞬時に判断することや共通得点を出すにあたり、なるべく短い時間で決定点を出していくことも映像研修のなかで感覚をつかんでいただくようにした。

#### 【個人D1】

- ・難度中の操作の関わり及び同じ操作の繰り返しについて判断を行う
- ・誤差の範囲内での難度のカウントの仕方について見方の統一
- ・ダンスステップの2つの多様性を見極め

#### 【個人D3】

〈Rについて〉

- ・回転の繰り返しに注意すること。特にシェネとブリンチックについては、実施を見て同じ回転に見えたものはノーカウントとする。
- ・受けの投げ返し/リバウンドについては、投げ返し後に落下した場合は全てノーカウントとする。

〈ADについて〉

- ・ベースと基準が正しく行われているものについては、カウントしていく方向。特に回転や視野外については実施を見て、ベースに正しく関わっているかどうかを確認しカウント、ノーカウントを判断する。
- ・手具の技術的欠点が0.3になりノーカウントになるのか、不正確な操作や受けの欠点0.1としてカウントするのかの判断を正しく行う。

#### 【個人E1】

- ・選手の作品や質は、アイデアのガイドとダイナミズムでしっかり差がつけられるようにすること。アイデアのガイドについては、全体のバランスを見てつけること。勢いがあるからダイナミズムの減点がないわけではなく、静かな曲であっても、曲に合わせて緩急をつけ表現できているかに目を置くこと。
- ・ADやRにおいて、同じ投げ受けが多く見られる場合には、手具要素でしっかり減点を入れること。

#### 【個人E3】

- ・手具の落下などの大きなミスによる減点だけにとらわれず、BDのフォームは正確であるか。
- ・BDの減点は何点か、四肢の動きは美しいか、姿勢欠点はあるか、手具操作は正確に実施しているかを見極めることから、選手の資質を評価するということを確認した。

#### 【団体D1】

- ・BDについては、5人の能力や身体の質をよく見てとるかとらないか評価すること。また、手具操作との兼ね合いや同じ操作がないかにも留意すること。
- ・EDについては、落下や衝突がない限り、確実にできたものはとる。斜め投げや軸回転を伴う投げは、正しくできているか見極めること。
- ・背面での輪に腕を通すキャッチは、タイミングや素早さを見て判断すること。タイミングが良ければ、視野外もとる。

### 【団体D3】

- ・CR、CRR、CRRRの投げと回転要素のタイミング、回転要素が360度行われているか
- ・CR、CRR、CRRR、Rで回転要素の重複がないか
- ・CCで異なる2種類の2回以上の受け渡しがあるか
- ・手以外、視野外の投げ受けの基準を見極めること
- ・Rを全員が正しく実施しているか

### 【団体E1】

- ・アイデアのガイドについて、映像を元にどのような作品にどのくらい減点を与えるかということを確認
- ・身体の資質は高いが、作品の芸術性が低いチーム、反対に身体の資質は不十分であっても、作品の芸術性が高いチームに、どのように減点を与えるか
- ・実施ミスが起きた時に、作品全体にどの程度影響を与えたかを見極めて適正な減点を与えること
- ・Dでの高得点に繋がるようにたくさんの連係を作品に入れているチームに対し、作品の流れや、音楽との一致が損なわれていないかどうかを見極めること
- ・団体における身体の表現の減点は、全ての選手が不十分であった場合に減点を与えること

### 【団体E3】

- ・身体の質の見極め
- ・移動の減点について統一見解及び目線合わせ
- ・身体難度のカウント時に起こるテクニカルな減点

## 2. 採点上起こった事項とその処理

### 【D全般】

- ・身体難度のカウントノーカウントは以前より明確になってきており、カウントできないものの多くは、バランス難度の静止不足とローテーション難度の回転不足と感じた。
- ・ダンスステップコンビネーションは演技にいくつか入っているが、多様性があり音楽と一致したステップというものはわずかであった。また、途中や後半にAD・CCの準備、中断があるため8秒に満たなくなってしまう例も多くあった。
- ・個人ADは手具の難度として点数を与えられるものとして考えると、ルールには則っているが悩むものも多かった。
- ・個人Rでは、まだまだ回転の重複が見られた。
- ・団体連係において、CR、CRRについて、投げと回転のタイミングの悪いもの、また回転をする選手が手具を投げていない、投げが低いなどで連係として成立しないものはいくつか見られノーカウントとした。

### 【E全般】

- ・48名、48チームの作品としての評価に差をつけるために、アイデアのガイドの減点について差をつけ評価をし、多様性の減点について正しく見極めるように心がけた。
- ・選手、チームの、身体レベル、質の見極め、完成度、そして実施度をテクニカルで正確に減点をし、選手、監督、そして観客が納得できる採点を目指した。

### 【個人D1】

採点規則に則りカウントしない場面

#### ①同じ操作の繰り返し

- ボール→ 付きの重複、ジャンプ中の投げの重複、吊り下げの位置、操作マークの技術の重複
- フープ→ 足の下での持ち替えの重複(操作マークの技術の重複)

- ②操作が難度に関わっていない
  - フリップオーバーの操作不十分
  - ローテーション中の手具操作の関わりが不十分
- ③8秒間のダンスステップ  
(ADへ繋げるにより8秒に満たない及び2つの多様性に欠ける)

### 【個人D3】

#### 〈Rについて〉

- ・回転の繰り返しが確認できたものについては2回目をノーカウントにした。
- ・おしりまわりの回転不足でR全体をノーカウントにすることが何回かあった。
- ・受けながらの回転で、上手く繋がられている選手については最後の回転までカウントすることがあったが、非常に少なかった。
- ・ボールの転回しながらの投げで、タイミングによっては視野外をカットするまたは回転後1回転しかないRに関しては全てノーカウントとすることがいくつかあった。

#### 〈ADについて〉

- ・映像研修で確認したことを念頭に、ベースと基準が満たしているものについてはカウントをした。特に0.2のADについてはかなり多くをカウントできた。
- ・投げ/受けのADは高さの見極めが難しく、審判間で点数が離れた場面もあった。判断に迷う高さについては、選手が行っている技術を見て、技術的に難しいものについては高い評価で、その他については小さい投げ受けで評価した。
- ・両種目とも転がしのADがあり、0.1の不正確な操作でカウントか、転がし自体の技術が満たされずノーカウントかの判断に迷うことがあったが、投げ受けと同様選手の技術を見て評価する場面があった。

### 【個人E1】

- ・上位の選手にミスが起こった際、減点が多くなってしまった。ミスがあった場合でも、作品にどのくらいの影響を及ぼしているのか全体を見て、点数をつけた。
- ・音に合っていると思う選手に高い評価を出した。しかし、小手先ではなく身体全体で表現できているのかを見た時に足りないと感じたので、審判長の見解をもとにDynamismとBodyに減点を入れた。

### 【個人E3】

- ・BDの減点が0.1か0.3か0.5か、採点中に迷う場合もあったが、映像研修でBDの減点が何点入るかの目線を合わせることができたため、統一して判断ができたように思う。実際に、採点中、BDに0.5の減点が入る場合もあった。
- ・後ろ持ちのローテーションやパンシェローテーション、ターンジャンプでは胴や肩がずれていることが多く、減点することも多かった。また、後屈のジャンプでの重い着地も多く見られた。
- ・手具操作に関わる減点について、フープは回しなどの操作中に面がぶれる、ひじが曲がるといったところで減点することが多かった。ボールについては常に両手受けになってしまっている場合と、片手で正しく受けようとしている場合の両極端であったように感じた。また、手具操作が体から遠くで行われているか、近くで扱っているか、はっきり分かれるように思った。

### 【団体D1】

- ・身体難度は、手具操作のタイミングが合っていなかったり、同じ操作を繰り返すチームがいた。その場合には、カウントしなかった。
- ・交換の受けでくぐり抜けながら回転をするチームが多かったが、身体の2部位くぐり抜けていない、先に手が出てきてしまったものに関して、カウントしなかった。
- ・0.5の技術的欠点がある場合は、個人と同様身体難度はカウントしなかった。
- ・確実に実施できていたものについては、カウントした。

### 【団体D3】

- ・ CR、CRR、CRRRにおいて、投げと回転要素のタイミングが不正確である、また投げが小さい投げであるため、連係がノーカウントとなる場合があった。
- ・ 4秒を超えて手具なしの状態にある、禁止要素で連係がノーカウントとなることはなかったが、CR、CRRで回転要素を実施する選手が投げを行わずに、その後手具を受けるのみであるという連係も少々見られた。また、R中、連係中に回転要素の繰り返しがあり、ノーカウントとなることもあった。
- ・ CRRで、投げた手具の下をくぐる場合、正しくくぐっているか、タイミングがずれてくぐれていないか、審判間で判断が分かれることがあった。
- ・ CCで床上の転がしと身体・手具上の転がしのため、同じ種類の技術でありノーカウントとなる場合があった。
- ・ 次の連係の準備であるか、CCであるかを見極め、カウント、ノーカウントを判断した。
- ・ 複数投げ、複数受けで中くらいの投げであるか、小さい投げであるか迷う実施があった。
- ・ 手以外、視野外の投げ受けの基準を実施していることが非常に多かったが、正確に行っているか見極め、カウント、ノーカウントを判断した。
- ・ 全体的に、複数投げが演技中に非常に多く含まれていると感じた。
- ・ 流れよくCCが演技に組み込まれている、準備動作がスムーズに複数投げにつながっているという演技が見られ、回転要素と投げのタイミングも含めたミスが少なく、高校生の連係のレベルは非常に高いと感じた。

### 【団体E 1】

- ・ フォーメーション間の移行について、動きの質が高く、こなしがよいチームが出て来た時に、減点を与えるべきか判断が難しかったが、要素から次の要素へと移行する際に、明らかに次のことを行うための移動だと見受けられるものが複数確認された場合には、減点を与えた。
- ・ ダイナミックな変化の減点について、アクセントがはっきりした曲を力強く踊りこなすチームや、音楽に抑揚が大きくなり流れるように踊るチームなどあったが、曲の特徴だけにとらわれずに、音楽の変化または、選手の動きの変化に注視して、減点を与えるべきチームに減点をした。
- ・ 身体の表現については、全ての選手が不十分であったかどうかについて、きちんと共通の見解を持って見極めることが出来た。
- ・ Dの得点を重ねていくために、同じ追加の基準や複数投げを乱用しているチームがあり多様性を伴って実施しているチームと差をつけられるように、多様性の各項目の中で該当する減点を与えた。
  - ・ 作品の質が高いチームに、実施ミスが生じた場合に、作品全体に与えた影響を判断して、減点し過ぎることがないように冷静に見極めることを意識した。
- ・ 投げ方、受け方、CR・CRRのバリエーションなどの多様性を見極めに固執してしまい、作品全体の質の評価にどの程度影響するものか、という判断が難しくなってしまったので、それぞれの減点項目について、万遍なく見ていくことが重要だと感じた。

### 【団体E 3】

- ・ 落下ミスが多く、採点規則に則り減点を加えた
- ・ 誤差の身体難度において0.1/0.3/0.5の減点を加えた（0.5の減点においては少なかった）
- ・ ミスによる1歩と流れの一部での1歩の減点の判断  
→事前映像研修を元に判断を行った

## 3. その他特記事項・意見・感想等

### 【個人D 1・団体E 3 松永 里絵子】

個人D 1においては、ルール変更に伴い難度の選択が懸念されましたが、全体的には高難度へ挑戦している選手が多く見受けられ、インターハイへかける意気込みが伺えました。しかし手具操作の関わりが曖昧な場面も見られ、身体難度の技術が向上しているだ

けに難度中の手具操作の技術及び正確性が増すことにより更に良い完成度になっていくように思います。ダンスステップにおいては更に手具を活かし多様・工夫に磨きをかけ実施して欲しいです。

団体E3において、D得点の上限がなくなりリスクな連係が非常に多く作品に組み込まれている事により1つのミスが大きく、落下や移動の減点幅も以前より増えた事からテクニカルの評価に繋がらないチームもありました。今後、身体の質と実施力を増していく事によりD得点の評価と共にテクニカルの評価にも繋がってくると感じました。

大会運営に携われた方々、地元高校生の生徒のみなさん、全ての方に感謝すると共に審判員として貴重な経験をさせて頂きました。ありがとうございました。

### 【個人D3 北澤 萌】

今回採点してみて、昨年よりもR・ADともに評価されやすくなったため、技術的に難しいものに挑戦している選手が多く、どの選手も正しく実施されていたと感じる。しかし、芸術の視点から見て技の羅列になっているのではないかと思われる選手もいたため、R・ADともに使用している音楽のその音に行く意味があるように構成していくことが必要なのではないかと思われる。Rの回転の種類について、シャネと脚を伸ばしたプリンチックの差が明確でない選手が多かった為、違う形であるのが明らかに見えるような実施にする必要がある。

この度は貴重な経験をいただき、ありがとうございました。

### 【個人E1 団体D1 清水 花菜】

[個人]

- ・良い作品には芸術の観点で良い評価をつけることができた。しかし、中盤順位の選手に対して差をつけきれなかった。
- ・ミスが出た際に、作品にどのくらいの影響を及ぼしたのかを判断することは今後の課題である。
- ・上位の選手は準備動作が演技として表現されており、手具のスムーズさが見られた。Dを確実にとってもらうために演技が途切れてしまう選手との差が明らかに出ていたように感じる。
- ・高校生の演技からは未熟な部分がありながらも、曲を表現しようとしており、感情のこもった演技を見ることができ、伝わるものがあった。芸術ではレベルや資質に関わらず、冷静に作品を見つつも、伝わるものを芸術の分野で評価していくべきだと改めて感じた。

[団体]

- ・座の位置にて連続的に交換するチームが多く、座位の変化を見極めきれなかった。座の交換は追加得点がつくため点数には加算されるが、単なる交換の連続ではなく、音に合った意味のある交換になるとなおい。
- ・0.1の身体難度を入れているチームは、ほとんどと言っていいほどやりきれなかった。
- ・ほとんどのチームが同じような交換の投げ受けをしていた。加点するためには仕方ないが、もう少し工夫があっても良いと感じた。
- ・ステップがCCとの組み合わせで途切れ、短く感じてしまったものもあった。しかし、作品のテーマ性を伝えようとするステップを身体全体で表現していたチームも多くあったように感じる。

今回この全国大会というこの機会に間近で演技を見させていただき、選手コーチの思いも伝わる距離感であり、とても良い経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

### 【個人E3・団体D3 佐藤 なつみ】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。

個人・団体ともに、身体が美しく、作品性のある演技が増え、高校生のレベルの高さを非常に実感いたしました。

開催されました静岡県の役員の皆様、補助役員の皆様、高体連体操部の皆様には、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

### 【団体 E1 本田幸子】

- ・CR、CRRについて、同じ投げ方で行なっていたり、いくつもの連係で人の上を通過するまたは、同じ複数投げと組み合わせているなど、多様性が欠如しているチームがかなり見受けられましたが、たくさん連係を実施していても多様性があり、それが気にならないというチームもあった。
- ・交換の投げ受けに伴う追加の価値が、どのチームもとても似通っていて、音と合わせたというより、交換の価値を高めることが目的になっているように感じた。また、交換を連続で行うチームが多かったが、構成上、連続で行うことに意味があるのかを感じた。音楽を表現するうえで、連続で行う必然性があるのかどうかを見直してほしい。
- ・CCについても、D得点を上げるために、単に複数の技術を組み合わせているだけのように見受けられるチームがあった。
- ・ステップ以外のところでも、常に曲の特徴と合った振り付けが見られるチームとそうでないチームの差があったように思う。
- ・連係以外ほとんど5人同時に要素を行うというチームが多数あり、団体特有のカノンやコーラル、コントラストなどを曲に合わせて盛り込んでいるチームからは、芸術性を感じた。

全体を通して、選抜大会や、地方大会に比べて作品そのものの完成度や、技術の熟練度が上がっていて、作品の質や、身体レベルに関わらず、この大会にかける熱意が伝わる演技ばかりでした。しかし、D得点の上限がなくなったことにより、全体的に技の羅列に見える作品が多かったように感じました。ですが、その中でも、音楽がとてもよく聴こえ、2分半を通して違和感を感じることなく終わるチームや、音楽の抑揚に合わせた豊かな表現で、大学生にも引けを取らないと感じるチームもあり、高校生の力に感動しました。

高校生日本一を決める熱い大会に、審判をさせていただく機会をいただいたことに感謝申し上げますとともに、開催権の役員の皆様をはじめ、大会運営に関わる全ての皆様にも厚く御礼申し上げます。

### 【副審判長 林 知佳】

昨年ルールが変更し、さらに今年もルールの変更があり、今まで以上に選手に合った作品・構成が求められる中、多くの選手が自身に合った身体難度を選択し、実施減点も少なくなるようにとの工夫が見て取れました。

選手のレベルも年々上がり、個人・団体においても高校生の枠を超えるような作品もあったことは、日本のレベルが上がったことをあらわしていると思いました。

また、開催県である静岡県の先生方、すべての役員の皆様、高体連体操部の皆様には準備から運営まで細やかなご配慮をいただきました。

この素晴らしい大会に審判員として参加できたこと深く御礼申し上げます。

### 【審判長 鈴木 あおい】

昨年の大きなルール変更から更に今年度大きな変更があった中で、スムーズでかつ分かりやすい審判業務を念頭に業務にあたらせていただいたが、年々高校生選手のレベルが着実に上がってきていることを実感でき、またD得点が10点を超えることになり、より今まで以上に作品の質が問われる中で、沢山の工夫ある作品や個性を生かした演技も多く見られたことは大変嬉しい限りである。それでもD得点に追われ、音楽を表現しきれておらず一つのエレメントを並べているだけになっている演技や、最後まで重心を高く身体を引っ張り、使い切れていない場面もまだ数多く見られた。やはり新体操の基本は正しくそして美しいこと。その前提のもと、音楽の特徴を生かし、さらに工夫がみられる作品、一人一人またそれぞれのチームの個性が十分に伝わる演技をこれから更に期待したい。

最後に、開催県静岡県の皆様、高体連体操専門部の皆様、その他関係くださった全ての方々に支えていただき今大会が終了できましたことを、厚く御礼申し上げます。